

## 外来種「ニューハクシミ」と戦う

近年、日本の博物館や美術館、図書館などで、新たな文化財害虫であるニューハクシミ *Ctenolepisma calvum* (図1) の生息が確認され、問題となっています。本種はもともと日本にいなかった種ですが、2022年の国内初確認以降、急速に分布域が拡大し、2025年までに



図1 ニュウハクシミ

全国19都道府県で確認されています。この害虫は、書籍や古文書などの紙の表面をかじり取るように食害し、糞による汚染も引き起こすため、文化財の価値を損なう潜在的なリスクが高いとされています。また本種は、従来のシミ類と異なり、単為生殖で交尾なしに繁殖することが可能なので爆発的に増える可能性があります。さらに、乾燥にも比較的強く、50%程に湿度管理された資料保存庫でも生息できるため、非常に厄介です。

侵入経路の遮断や温湿度管理の徹底などといったニューハクシミの従来の防除方法だけでは対応が困難であるため、新たな対策が模索されています。こうした状況の中、東京文化財研究所では、アリ類やゴキブリ類などの駆除に使われている殺虫成分を配合した毒餌（ベイト剤）のシミ類への適用可能性について検証を進めていました（図2）。そして、同所の研究において、アース製薬のアリ用ベイト剤「[アンツノー粒剤](#)」や「[アンツバスター](#)（粒剤）」がニューハクシミに対して有効であることが確認されました。



図2 試験風景

この研究結果に基づき、当社は東京文化財研究所が開発した「防除用キット」（図3）に対し、「[アンツノー粒剤](#)」をサンプル品として無償で提供しました。このキットは、ニューハクシミが好む暗所におびき寄せる工夫が施された毒餌置き場とベイト剤を組み合わせたものです。同所は、2025年11月からこのキットの全国の博物館などへの無償提供を開始しています。

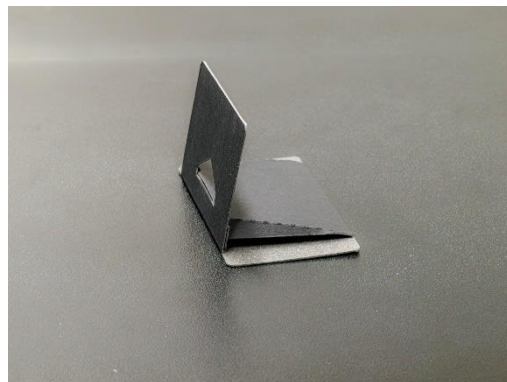


図3 防除用キット

ニュウハクシミは繁殖力が強いいため、生息が確認された施設では急速に個体数が増加する可能性があり、早期発見と防除対策の確立が急務となっています。当社は、当社の持つ害虫防除に関する専門知識と製品を活用し、ニュウハクシミをはじめとする外来生物の対策に協力することで、生物多様性の保全と文化財の保護に取り組んでまいります。

※画像はすべて、東京文化財研究所からご提供いただきました。